

2021(令和3)年11月25日更新 報道発表資料
[本リリース発信元] ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

ロームシアター京都<レパートリーの創造> 市原佐都子/Q『妖精の問題 デラックス』



あらゆる「生」を肯定する！
市原佐都子の代表作が京都で生まれ変わる
新たなキャスト、スタッフとともにさらなる地平へ

日時：2022年1月21日(金)～24日(月)

会場：ロームシアター京都 ノースホール

作・演出：市原佐都子(Q)

[本リリースに関するお問合せ先]

ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団) 広報担当：松本、山形
電話：075-771-6051(9:00～17:00) FAX:075-746-3366 E-mail:press@rohmtheatrekkyoto.jp

このたびロームシアター京都では、「レパトリーの創造」シリーズ第五弾として、**市原佐都子／Q『妖精の問題 デラックス』**をプロデュース、上演いたします。
第五弾となる今回は、2017年に劇団「Q」にて初演された「妖精の問題」を、市原佐都子／Qとロームシアター京都がタッグを組み、新たなキャストとスタッフで再創作します。



■ 本企画のポイント

① 今、最も注目すべき 80 年代生まれの演劇人・市原佐都子がついにロームシアター京都に登場！

人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚でとらえた劇作、演出を行う市原佐都子。時代に光を当てる鋭い感性と確かな筆力が評価され、第 64 回岸田國士戯曲賞を「バッコスの信女ーホルスタインの雌」で受賞。また、2021 年 4 月に城崎国際アートセンター芸術監督に就任し、今秋にはスイス・チューリッヒのノイマルクト劇場との共同制作にて新作「Madama Butterfly(蝶々夫人)」を発表するなど、国内外の演劇界から熱い視線を集める劇作家・演出家です。ロームシアター京都のこれまでの蓄積と、新進気鋭の劇作家・演出家とのタッグにより、話題の舞台作品を発表します。

② 異なるスタイルの三部構成で描かれ、あらゆる生を肯定する戯曲「妖精の問題」

2016 年に起きた相模原障害者施設殺傷事件をきっかけに 2017 年に初演された本作。市原氏は、事件そのものを扱うのではなく、「事件によって直視させられた自分自身の中にある偏見や生きづらさから作品を創作した」といいます。

タイトルの「妖精」は「見えないもの」の隠喩。**ルッキズムや優生思想など、現代の日本社会で「見えないことにされているもの／しているもの」に真正面から向き合った**作品です。2017年初演版では、「ブス」がマイノリティとされる社会を〈落語〉形式で語る一部、突然変異の「ゴキブリ」について歌い上げる〈コンサート〉形式の二部、そして共生菌でつくられるヨーグルト「マングルト」を〈セミナー〉形式で紹介する三部という3つの形式で展開。自虐や偏見に満ち溢れた世界が異なるスタイルで表現され、コミカルかつ強烈な言葉で描き出しながら偽善的ではない方法であらゆる生を肯定する、グルーヴ感あふれる作品です。

京都では、2018年に「KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭」で上演。その後、国内外各地で上演を重ね、オンライン版を含めさまざまなバージョンが制作されるなど、市原の代表作ともいえる「妖精の問題」が、満を持して、「レパートリーの創造」として、京都に再び登場します。

③ 新たな俳優・スタッフと再創作する“デラックス”版

再創作にあたり、出演者の公募／オーディションを開催。初演で1人の俳優が演じた登場人物を、今回、才能あふれる7人の俳優が演じます。一部の「落語」は二人の掛け合いに、二部にも夫役が登場するほか、三部のセミナーも性別を超え、三役を別の俳優が演じます。複数の俳優が演じることで、会話で紡がれる戯曲の新たな魅力と、作品が持つ普遍性を再発見していきます。

音楽を手掛けるのは初演に引き続き、**額田大志**。FUJI ROCK FESTIVAL 出演やCM音楽の制作など、精力的に活動する8人組バンド「東京塩麹」で作曲を担当する一方、演劇カンパニー「ヌトミック」を主宰し、第16回AAF戯曲賞受賞など、戯曲の執筆と演出も手がける注目のアーティストです。初演でピアノ演奏だった二部が今回、バンド演奏にバージョンアップするのも聴きどころのひとつです。

舞台美術は、先般「第2回小嶋一浩賞」を受賞した建築家ユニット **dot architects**。

ロームシアター京都では、シリーズ 舞台芸術としての伝統芸能 Vol.2 能楽『鷹姫』の舞台美術や「OKAZAKI PARK STAGE」のステージ設計を手掛けた実績があります。今回は劇場空間そのものをデザインし、演者と観客との境目をより曖昧にする仕掛けで、作品世界に遊び心を散りばめます。また、衣裳に京都で活動し、東京でも注目を集めつつある舞台芸術団体「お寿司」の**南野詩恵**が加わり、特徴的でユーモアあふれるビジュアルで作品に彩りを添えます。

特に、今回の再創作で市原がこだわるのは「**笑い**」。ドラマトウルクに美学者の**木村覚**を迎え、「妖精の問題」の中で展開している“自虐的な笑い”を改めて捉えなおす機会としていきます。京都で新たなキャストとスタッフで再創作される「妖精の問題 デラックス」にご期待ください！

■「妖精の問題」について

私は見えないものです
見えないことにされるものです
見えないことにされるということは
見えないことと同じなのです

一部「ブス」

作品世界でマイノリティとされる「ブス」の女学生二人。もうすぐ選挙が行われる。最近、存在感を増している「不自然撲滅党」逆瀬川志賀子の政見放送を二人は見る。

「私さ 整形しようかと 思ってたねん」
「普通の顔して 天才のトークするの」

二部「ゴキブリ」

ラーメン屋の近くに住む貧困夫婦は、家に生息する「ゴキブリ」に悩まされている。ある日、夫は大量の害虫駆除剤を焚く。異常なゴキブリが発生する。妻は妊娠しており、不意にその煙を吸ってしまい…。

「異常 は生き物ではありません 現象です
現象はなにかに取り憑かなければ見えない お化けなのです」
「お前の異常は生命力となりお前こそ生き延びるのです」

三部「マングルト」

自分自身の体内常在菌を利用して作る食べ物「マングルト」。その創始者である小室淑子の意思を引き継いだ礼子による「マングルト」についてのセミナー。

「自分は地球の一部だし 地球のすべてが自分だし
わかりやすく言いますと あなたのからだは地球だとすると
あなたはまんこにすんでるデーデルライン桿菌のなかのひとつの菌くらいの存在です
それくらいのものともいえるし 小さくて大きな存在というわけですね」

※「バツコスの信女-ホルスタインの雌」(白水社) 併録「妖精の問題」より引用

「妖精の問題」上演歴

2017年 こまばアゴラ劇場(東京)/初演

2018年 TPAM2018 フリンジ STスポットセレクション STスポット(横浜)

2018年 KYOTO EXPERIMENT 2019 公式プログラム京都芸術センター(京都)

2018年 Japan Playwrights Project 2019 Martin E. Segal Theater Center

2020年 オンライン版

2021年 中国にて上演記録のオンライン配信

インドネシアにて現地の俳優と創作したオンライン版の上演

「ソウル・マージナル・シアター・フェスティバル」で韓国の俳優による上演

■「レパートリーの創造」について

「レパートリーの創造」は、ロームシアター京都が、2017年度から取り組んでいるプログラムです。劇場のレパートリー演目として時代を超えて永く上演されることを念頭に、公立劇場が主体的に作品製作に取り組みます。また、作品創造のプロセスを通じて、俳優、ドラマトウルク、制作者等の専門家人材の育成や観客育成のための関連プログラムを企画し、レパートリーの創造から各地域における劇場文化をつくることを目指します。

これまでの「レパートリーの創造」

- ・ [木ノ下歌舞伎「心中天の網島ー2017 リクリエーション版ー」](#) (2017年10月)
- ・ [木ノ下歌舞伎「糸井版 摂州合邦辻」](#) (初演 2019年2月、再演 2020年10-11月)
- ・ [ジゼル・ヴィエンヌ エティエンヌ・ビドー＝レイ 『ショールームダミーズ #4』](#) (初演 2020年2月、再演 2021年11月)
- ・ [ロームシアター京都開館5周年事業 松田正隆作・演出「シーサイドタウン」](#) (初演: 2021年1月)

■プロフィール

作・演出 | 市原佐都子 / Satoko Ichihara



© Flavio Karrer

劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督。
1988年大阪府生まれ福岡県育ち。桜美林大学にて演劇を学び、2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回AAF戯曲賞受賞。2017年『毛美子不毛話』が第61回岸田國土戯曲賞最終候補となる。2019年に初の小説集『マミトの天使』を出版。同年『バッコスの信女ーホルスタインの雌』をあいちトリエンナーレにて初演。同作にて第64回岸田國土戯曲賞受賞。公益財団法人セゾン文化財団セゾン・フェローアーティスト。

音楽・演奏 | 額田大志 / Masashi Nukata



©コムラマイ / タカラマハヤ

作曲家、演出家。1992年東京都出身。8人組バンド「東京塩麴」、演劇カンパニー「ヌトミック」主宰。「上演とは何か」という問いをベースに、音楽のバックグラウンドを用いた脚本と演出で、パフォーミングアーツの枠組みを拡張していく作品を発表している。舞台音楽の作曲家としてQ、パスカル・ランベール、岩渕貞太、コンプソonzなどに参加。最近は、目的のない集まりを開催することに精を出している。

👉 WEB マガジン「Spin-Off」掲載 市原佐都子&額田大志インタビューは[こちら](#)

舞台美術 | dot architects (ドットアーキテクト)



建築家ユニット。2004 年設立。大阪・北加賀屋にて、アート、オルタナティブ・メディア、アーカイブ、建築、地域研究、サークル、NPO など、分野にとらわれない人々や組織が集まる「もうひとつの社会を実践するための協働スタジオ」コーポ北加賀屋を拠点に活動。設計、施工のプロセスにおいて専門家・非専門家に関わらず様々な人との協働を実践している。設計だけに留まらず、現場施工、リサーチプロジェクト、アートプロジェクトなど様々な企画にもかかわる。代表作は Umaki camp(2013、小豆島)、千鳥文化(2017、大阪)など。現在のメンバーは家成俊勝、赤代武志、土井亘、寺田英史、宮地敬子、池田藍、石田知弘の 7 名。2021 年、第 2 回小嶋一浩賞を受賞。

出演 | 【第一部】



朝倉千恵子 / Chieko Asakura | 配役：女子中学生

東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。フリーランスで関東を拠点に活動中。チェルフィッチュ『三月の 5 日間』リクリエーション(2017 年～2019 年)、ジゼル・ヴィエンヌ、エティエンヌ・ビドー＝レイ『ショールームダミーズ # 4』(2020 年)、口口『いつだって可らしいほど誰もが誰か愛し愛されて第三小学校』(2021 年)に俳優として参加。また自身でもパフォーマンスや映像作品を制作している。



筒井菰奈子 / Kanako Tsutsui | 配役：女子中学生

1994 年生まれ。ピッコロ演劇学校本科 33 期・研究科 33 期生で演劇を学ぶ。在学中より自主公演や関西小劇場に出演。その後関西だけでなく、さまざまな劇団やカンパニーに出演。映像にも積極的に参加を始め、現在全国で公開中の内田伸輝監督作品・映画『女たち』に出演。

【第二部】



大石英史 / Eiji Oishi | 配役：男

1987 年大阪生まれ。俳優。フリーで活動している。2015 年から 2020 年まで dracom に登録メンバーとして参加。過去には、お寿司、akakilike、努力クラブ、ブルーエゴナク、THE ROB CARLTON、劇の虫、庭劇団ペニノ、維新派、新聞家、トリコ・A プロデュース、ソ・ヒョンソク演出作品、sons wo:、村川拓也演出作品、藤田貴大作・演出作品などに出演。また、国内外の演劇祭に多数参加している。



キキ花香 / Hanaka Kiki | 配役：女

88 年 1 月 27 日生まれ。水瓶座。大阪府交野市出身。2009 年より劇団子供鉅人に入団。現在は東京を中心に俳優として活動するかたわら、舞台や映画の衣装スタイリスト、KI.pharmacy 名義で服や小物の製作や販売など色んな角度から自分の形を追求している。

【第三部】



廣川真菜美／Manami Hirokawa | 配役：礼子さん

大学卒業後に俳優を志し俳優の運転手を経て、小松台東やろりえ、桃尻犬といった話題の団体に参加。小劇場の舞台を中心に活動しながら、近年では足立紳監督「喜劇 愛妻物語」瀬々敬久監督「なり ゆきな魂、」等の映画、タニノクロウ秘密倶楽部「Marzo VR」、webCMなどの映像作品にも出演するなど活動の場を広げている。



富名腰拓哉／Takuya Funakoshi | 配役：絵美ちゃん

2000年生まれ。日本大学芸術学部映画学科演技コース在学中。18歳の頃からエキストラや小さな役で舞台・ドラマに出演し、最近は自主制作映画で主演を務める。俳優という仕事を「社会に対して訴えることができない人たちの代弁者」と捉え、今後は様々な作品に関わりながら、舞台や映画などジャンルを問わない活動を目指している。明るく人見知りのない性格。



緑ファンタ／Fanta Midori | 配役：小室淑子

京都府生まれ。大阪を拠点におもに小劇場にて舞台出演。1993年より社会人劇団「満員劇場御礼座」に所属し、現在も年一回ペースの公演に参加している。2014年より、シアターコクーン「プレイタイム」(2020)を手掛けた美術家／演出家・梅田哲也氏の「Oオ」「5つの船」「7つの船」他に出演。タイ・バンコクで、子どもたちとのストリートパフォーマンス「なんだこれ?!サークル」(2016)にも参加した。

演奏 |



秋元 修／Shu Akimoto | ドラム

札幌出身。2014年、洗足学園音楽大学ジャズコース首席卒業。Wacken Open Air 2013にMysterious priestessとして、Montreux Jazz Festival Japan 2017に菊地成孔プロジェクトとして出演。2020年、単身渡米。DC/PRG, Song-XX, Klehe等に参加。



石垣陽菜／Haluna Ishigaki | ベース

神奈川県出身。洗足学園音楽大学ジャズコース卒業。

Mike Stern氏、Randy Brecker氏、日野皓正氏、渡辺香津美氏らと共演歴をもつ。自身のバンド「TAMTAM」ではカナダツアーやFUJIROCKに参加し、昨年5月に発売したアルバム「We Are the Sun!」では鎮座 DOPENESS氏と共演。その他、多くの作品に携わる。



高橋佑成／Yusei Takahashi | キーボード

1994年東京生まれ。明治学院大学文学部芸術学科卒業。

13歳の頃からジャズに興味を持ち独学でジャズを始める。その後中学生対象の世田谷ドリームジャズバンドに加入。日野皓正氏を始めとしたジャズミュージシャンに触れ音楽を学ぶ。現在は世田谷トリオ(岩見継吾(b)、吉良創太(ds))、m°fe(松丸契(as)、落合康介(b))、日野皓正 Quintet、自身が主宰する音楽ユニット“秘密基地”、トラックメイカーのSTUTS氏のバンドに参加などジャズに限らず多岐に渡って活動している。

Photo by Eiji Kikuchi

■ 市原佐都子／Q 作品紹介コラム (初出：ロームシアター京都 2021 年度下半期事業パンフレット)

※ 本稿はロームシアター京都 WEB マガジン「Spin-Off」内でもお読みいただけます。

「クレバーアンドクレイジー」 文：山崎健太（批評家、ドラマトウルク）

市原佐都子／Q の作品は私に「見えないもの」の存在を突きつける。それは社会的に「見えない（ことにされている）もの」であり、ときに私が「見えない（ことにしている）もの」、つまりは「見たくないもの」でもあるだろう。市原の手によって舞台上上げられ過剰なエネルギーをもって自らの存在を主張するそれらを、客席に座った私はもはや見ないままで済ますことはできない。こうして劇場は対峙の場となる。

「見えないもの」と一口に言っても、その内実は様々だ。たとえば生理や排泄、性行為や体毛の処理。市原作品に登場する女たちはしばしば、それらについて声高に語る。それは日本社会における抑圧の裏返しだ。残念ながら、現代日本において「見えないもの」の領域に押し込められているのは、圧倒的に女性に関わる事柄なのだ。

2016 年に初演され第 61 回岸田國士戯曲賞の最終候補作にもなった『毛美子不毛話』は、男性による規範の押しつけとそれを女性が内面化していくプロセスを鋭く抉り出す作品だ。「本革のパンプス」を探し求める「私」はその道中、様々な人々と出会う。この作品における「本革のパンプス」は自立した女性の象徴とでも言うべきアイテムなのだが、やがて明らかになるのは「路地裏でなら本革のパンプスを買えるらしい」という噂自体が男性優位社会を維持するためのものだったという事実である。真相を知った「私」が「誰かに 私 踊らされるわ」と踊らされていることを自覚しつつ、それでも「みずからの意志をふり絞って力強く踊る」ところでこの作品は幕となる。

不気味なことに、「私」以外の登場人物（やがて恋人となる会社の先輩、もう一人の「私」、見知らぬおじさん、謎の中国人）は全て一人の男性俳優によって演じられることになっている。「私」の前に繰り返し現れ、手を変え品を変え行動規範や価値基準を提示し押し付けてくる「彼ら」の実体は一人の男なのだ。しかもそれはもう一人の「私」となり代わり、目指した理想でさえ「彼ら」によって周到に用意されたものに過ぎない。自らがその内部に組み込まれた構造の仕組みを知ることは難しく、ましてやそこから逃れることはより一層困難である。

あいちトリエンナーレ 2019 で初演され第 64 回岸田國士戯曲賞を受賞した『バッコスの信女ーホルスタインの雌』の主人公は一見したところ平凡な主婦だ。家畜人工授精師として働いていた彼女はかつて、自らの手で人間の精子を牛に注入し、牛と人間のハーフであり、しかも上半身が女、下半身が男の「ハーフ」でもある「獣人」を生み出してしまったことがあった。獣人は自分を捨てた母と改めて結びつき「生まれ直す」ことを夢見るが――。

市原の作品にしばしば動物や異種交配のモチーフが登場する。それらは現代社会では見えない場所へと追いやられてしまった排泄や生殖といった動物としての人間の側面を表舞台へと回帰させる。獣人が訪れるのが主婦が暮らすリビングダイニングだというのも示唆的である。家事労働もまた、現代社会においてはしばしば「見えないもの」として扱われきた。そこはまさに「見えないもの」の、その押し込められてきたエネルギーの渦巻く領域なのだ。

牛のモチーフはさらに、牛乳や牛肉のイメージを介して養育と食の問題を生殖の問題に接続し混線させる。人間と動物。男と女。獣人の存在は二項の境界を揺るがし、そのとき人間中心の、あるいは男性中心の倫理は失効する。……のだが、実際の上演では、獣人の強烈な存在感が、このような理屈以前の説得力をもって私を組み伏せたのだった。市原作品の登場人物はいつも全力で「私はここにいる」と叫んでいるようだ。市原は「見えないもの」を生み出す現代社会の構造をクレバーな手つきで分析し批判しつつ、一方でその構造を分析ごと吹き飛ばすかのような爆発的なエネルギーを舞台に上げてみせる。理性と衝動のハイブリッド。獣人の姿は市原の演劇それ自体にも重なって見える。

『バッコスの信女ーホルスタインの雌』はエウリピデスによるギリシア悲劇『バッコスの信女』を下敷きに書かれている。男性のみで演じられていたギリシア悲劇を女性のみで演じる形に翻案してみせる批評性、古典を現代の鏡として利用するその手つきも巧みではあるのだが、それと同じかそれ以上に重要なことは、過剰なエネルギーを注ぎ込んでも決壊しない確かな足場として古典の枠組みが機能している点だろう。古典を参照することで市原はむしろ、より自由に創作する術を手に入れたのだ。

2021年4月に市原は平田オリザの後任として城崎国際アートセンターの芸術監督に就任し、7月には同館でスイス・チューリッヒのノイマルクト劇場の共同制作作品としてオペラ『蝶々夫人』を参照した新作『Madama Butterfly (蝶々夫人)』の滞在制作も行なっている。2022年2月にはシアターコモンズ(東京)、ロームシアター京都での上演も予定されているこの作品は、西洋人男性から日本人女性へと向けられたまなざしを反転し、日本人女性の視点から西洋人男性を描く作品になるという。古典を踏み台に市原はどこまで飛んでみせるのか。ヨーロッパの劇場との共同制作がどのように結実するかも楽しみに待ちたい。

ロームシアター京都のレパートリーとして今回リクリエーションされる『妖精の問題』は、2016年の相模原障害者施設殺傷事件を契機に書かれた作品だ。市原は「事件によって、自分のなかにある優生思想や、自分が抱えている生きづらさを意識させられた」という[*1]。「見えないもの」は、必ずしも自分の外側に存在しているわけではない。そのことに無意識に気づいているからこそ、私はそれを見たくないのである。だが、そのように目を逸らす行為こそが、生きづらさの源だという可能性はないだろうか。「見えないことにされているもの」や「見えないことにしているもの」に目を向けることは「できるだけ偽善的ではない方法であらゆる生を肯定する」ための最初の一步となり得る。その意味で市原佐都子/Qの作品は、まさに「必見」の演劇と言えるだろう。

1: 市原佐都子『バッコスの信女ーホルスタインの雌』(白水社)あとがきより

■ 公演情報

ロームシアター京都 <レパートリーの創造> 市原佐都子 / Q「妖精の問題 デラックス」

公演詳細ページ  [こちら](#)

作・演出：市原佐都子（Q）

出演：

〔第一部〕 朝倉千恵子・筒井菰奈子

〔第二部〕 大石英史・キキ花香

〔第三部〕 廣川真菜美・富名腰拓哉・緑ファンタ

日時：2022年1月21日（金）19:00

1月22日（土）14:00 ☆ / 18:00 ★

1月23日（日）14:00 ☆

1月24日（月）14:00 ★ / 19:00

★アフタートーク

登壇者：22日（土）18:00の回 市原佐都子・木村寛、24日（月）14:00の回 市原佐都子・額田大志

☆託児サービスあり

※開場時間：開演の30分前 ※上演時間：90分（予定）

※全ステージ、多言語字幕タブレット貸出あり

会場：ロームシアター京都 ノースホール

料金：【全席自由】一般 3,500円 ユース（25歳以下）2,000円 18歳以下 1,000円

※推奨年齢中学生以上、未就学児入場不可。

※「ユース」「18歳以下」は要証明書提示。

チケット取扱：

■オンラインチケット 24時間購入可 ※要事前登録（無料）

<https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/> ※12月1日よりURLが左記に変更となります

■ロームシアター京都 チケットカウンター

TEL. 075-746-3201（窓口・電話とも 10:00~19:00 / 年中無休 ※臨時休館日を除く）

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため短縮営業する場合あり

■京都コンサートホール チケットカウンター

TEL. 075-711-3231（窓口・電話とも 10:00~17:00 / 第1・3月曜日休館 ※休日の場合は翌日）

■チケットぴあ TEL. 0570-02-9999（Pコード：508-799）

■e+（イープラス）<https://eplus.jp>

スタッフクレジット：

音楽/額田大志（東京塩麹ノストミック） 演奏/秋元修、石垣陽菜、高橋佑成、額田大志

舞台美術/dot architects 衣裳/南野詩恵 照明/魚森理恵

音響/稲荷森健 映像/小西小多郎 舞台監督/川村剛史（ロームシアター京都）

ドラマトゥルク/木村寛

演出助手/山田航大 制作助手/寺澤聖香 制作協力/山里真紀子(Q)

チラシデザイン/吉岡秀典（セブテンバーカウボーイ）

イラスト/狩野岳朗

企画製作：ロームシアター京都

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市
京都芸術センター制作支援事業

問合せ先：ロームシアター京都チケットカウンター TEL.075-746-3201

■ 関連企画/「妖精の問題」の「問題(クエスチョン)」をひもとく 概要

インタビューシリーズ

今日の芸術表現のあり方、特に笑いを巡る表現について考察を進めるインタビューシリーズ。本作のドラマトゥルク木村寛がインタビュアーとなり、舞台芸術のみならず、さまざまなジャンルのゲストを迎える。各インタビューと木村の論考をロームシアター京都のWEBマガジン SPIN-OFF

（<https://rohmtheatrekkyoto.jp/spin-off/>）に掲載する。

・【第一回】鈴木励滋（「生活介護事業所カブカブ」所長／演劇ライター）  [記事こちら](#)

おしゃべり会「戯曲を読もう、話してみよう。」

ファシリテーターに「京都岡崎 蔦屋書店」コンシェルジュの鶴飼慶樹氏を迎え、「妖精の問題」の戯曲を一般の人たちと一部ずつ読み進め、その感想やテーマとされていることについてざっくばらんに語りあう「おしゃべり会」を開催する。

日時：

第1回 2021年11月27日（土）19:00～ 第一部「ブス」を読む

第2回 2021年11月29日（月）19:00～ 第二部「ゴキブリ」を読む

第3回 2021年11月30日（火）19:00～ 第三部「マングルト」を読む

※各回、1時間30分程度。

会場：パークプラザ3階 会議室

定員：各回10名程度

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都岡崎 蔦屋書店

 イベント詳細は [こちら](#)